

Urban Design Lab. Magazine

2014.12.30 vol. 224



あの先輩はいま、

OUR GREAT SENIOR, WHAT DO YOU DO?

石徹白地区の取り組み p.4

平野彰秀さんの歩み p.6

設計事務所の仕事とは p.14

東京大学
工学部都市工学科/
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

編集長：高梨 遼太郎

編集委員：道喜 開視 原 由希子 今川 高嶺

柄澤 薫冬 柴田 純花 高橋 舜

中島健太郎 益邑 明伸

あの先輩はいま、

今回の都市デザイン研究室マガジンは
OB・OG 特集です。今回は岐阜県郡上市白
鳥町石徹白地区に住む平野彰秀さんのインタ
ビューと、十月に行われた、設計事務所に勤
務されている先輩方とのトークイベント「と
しとーく」の二つの特集を組みました。都市
デザイン研究室を卒業された方が、その後ど
ういった進路を歩まれているのか、そして、
都市に関わることを仕事にするということは
どういうことか、今回の特集で少しでも迫っ
ていきたいと思っています。

*

この写真は、都市デザイン研究室OBの平
野彰秀さんを訪ねて、十二月五日から六日に
かけて石徹白地区に行ったときの写真です。
私たちが訪れたときには村は既に分厚い雪で
覆われており、厳しい自然と向き合いながら
長い歴史を刻んできたこの村の一面を垣間見
ることが出来ました。

石徹白地区は人口二百七十人ほどの集落で、
小水力発電の導入をきっかけに地域振興の動
きが高まり、移住者も増加している地域です。
それを陰で支えてきたのが平野さんで、これ
までさまざまな取り組みをされてきました。
また、二〇一一年からはこの石徹白地区に移
り住み、地域に暮らしながら集落の将来のた
めに地域づくりを進めています。

*

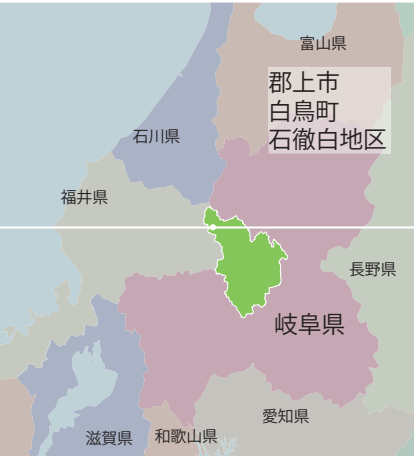
「としとーく」では伊藤雅人さん、鎌形敬人
さん、永野真義さん、前川綾音さん、矢吹剣
一さんの五名の先輩が来てくださり、都市に
まつわる仕事のなかでも、特に設計事務所か
ら都市に関わるとはどういうことかというこ
とをお聞きしました。先輩方が勤務されてい
る会社の実情や違い、仕事の面白いところな
ど話題は多岐にのぼり、当日は多くの学生と
先輩方で盛り上がっていました。



石徹白地区の取り組み

About ITOSHIRO Village

平野さんの住む石徹白地区とはどのような村なのでしょうか？また、そこではどのような取り組みが行われているのでしょうか？まずは石徹白地区のプロフィールと活動をご紹介します。（編集：M1 今川）



■石徹白地区

石徹白地区は郡上市の最奥にある、縄文時代から続く歴史ある集落です。白山信仰の拠点として古代から栄え、近世まではどの藩にも属さず、社家社人の人々が暮らす村でした。もともと夏は白山信仰の旅人のための宿場を営み、冬は旦那場と呼ばれる場所に出向き、教えを説いて暮らしていました。昭和 30 年頃約 1200 人いた人口は現在 1/4 ほどとなり、世帯数 100 戸、高齢化率約 50% と、過疎化・高齢化が進んでいる地域です。特に、石徹白小学校は全児童が 12 人と、存続の危機にあります。

ここでは NPO 法人やすらぎの里としろ、NPO 法人地域再生機構などが事業主体となって、科学技術振興機構の研究費を活用し、2007 年頃から小水力発電の導入にむけて動き出しました。小水力発電は、エネルギーの自給自足だけでなく、村が一つになって地域づくりを進めていききっかけにもなっており、現在では特産品開発等様々な活動が行われ、移住者も増加しています。



▲白山中居神社のふもと



▲九頭竜川上流で、ここから福井まで流れる



写真は村に設置された上掛け水車。2016 年までには地元住民らで農協を組織し、他に 68kW、103kW の 2 つの水力発電所を作る予定。売電益を使って地域づくりを進め、この石徹白地区を存続させていこうとしています。

■小水力発電

小水力発電は、主に年間 1000kW 以下の規模の水力発電のことを言います。基本的には一定以上の落差と流量のある河川等を利用して行われ、昼夜年間を通じて安定した発電が可能です。また、河川の他に農業用水路、上下水道、ダム放流水等、さまざまな場所で発電できることや、経済性の高さ、技術的問題がほぼ解決されていることなどから、近年新エネルギーとして高い注目を浴びています。

石徹白地区では、かつて村で水力発電がおこなわれていて、エネルギーを自給自足していました。そのこともあり、平野らが小水力発電をしようと呼びかけたときに、手を挙げたのが石徹白地区でした。手探りの状態でらせん型水車の設置・実用化に成功し、最初は電球を灯すだけだったものが、やがて住宅兼 NPO の事務所内の主要な電気をまかなえるようになりました。また、地域にこの電力を還元するために、常時 1.5kW の発電が可能な上掛け水車を設置し、当時休止状態だった白鳥ふるさと食品加工伝承施設（以下、加工所）の電気をまかなえるようにし、現在ではつづもろこし等特産品開発が進められています。

■地域づくり

小学校存続の危機の中、地域の存続のため子育て世代が住み続けられるよう、「30 年後も小学校を残そう」をスローガンに地域づくりが進められてきました。石徹白地区では、村の若い人たちで公式 HP やオリジナルグッズを開発したり、村の女性を中心となって、村の食品を使ったカフェを開いたり、様々な人を巻き込んだ地域づくりが行われています。現在では、石徹白に視察に訪れる人が年間 500 人以上おり、小学生未満の子供 7 人を含む、7 世帯 20 人が移住してきました。

加工所内の様子。小水力発電を利用して加工所を動かし、とうもろこしの乾燥品等農産物を使った村の特産品を作っています。これによってエネルギーと食の地産地消が進み、冬の雇用も生み出しています。



■石徹白での取り組み タイムライン





平野彰秀さんの歩み

The Life of AKIHIDE HIRANO

石徹白で一泊した次の日の朝、平野さんのご自宅で、ご自身のキャリアについてインタビューしました。平野さんは1975年岐阜市に生まれ、学部は都市デザイン研究室、修士で東大院新領域の大野研究室を卒業、その後北山創造研究所、ブーズ・アレン・ハミルトンを経て2008年春岐阜にUターンし、2011年秋より郡上市白鳥町石徹白に移住しました。現在、地域再生機構、全国小水力利用推進協議会理事等の仕事をされています。今回はそんな特徴的なキャリアを歩んでこられた平野さんに、中学・高校時代からいまに至るまでの思いと歩みを語っていただきました。

※

そもそもの原点は

中学高校のときに二つ原点となっている出来事があります。僕の実家は岐阜市

の郊外にあるんですね。郊外というのは都市計画的にいうと中心市街地があってそこから大体3,4km離れたところなんですけど、もともとは田んぼが一面に広がっていて農村集落が展開しているという場所で、そこが宅地化が進んでいて、区画整理が行われていました。僕の実家はまだ一面田んぼで宅地化は進んでいなくて、窓をあけると蛙の鳴き声が聞こえてくるような場所で、そこで小学校時代を過ごしていました。中学から鹿児島に行ったんですけど、近くに岐阜環状線という幹線道路が通ったんですね。うちの実家は幹線道路から一本入ったその裏で、幹線道路沿いにロードサイドショップが次々できていって。そうするとその一本裏は必然的に駐車場になるんですね。本来的には都市計画的に言えば宅地になっていくはずだったのに、一面駐車場になってしまったというのが中学高校で起きたことでした。田んぼがなくなっ

て駐車場になるというのは子供心に疑問に思うところがあって、できれば田んぼというか宅地と農地が混在をしているような、家の近くに農村風景があるようなところをなんとか残したいというのが一つの原点。

もう一つの原点は僕が中学生のころに、長良川河口堰というのが建設されることになりました。長良川というのは岐阜市のど真ん中を流れていて、岐阜の人にとっては長良川と金華山がアイデンティティになっていると。岐阜市内でも川で泳げる場所があったりとかすごくきれいな場所なんですね。大きなダムもない川であゆとかのぼってくるような川なんですけど、建設の理由が納得できる理由ではなくて、当時僕の中高のころは環境問題がいわれるようになってきたころなので、人間の社会と自然環境と折り合いをつける形というのを探りたいと思ったのが中学の頃ですね。

家の近くに農村風景があるようなところをなんとか残したいというのが一つの原点

都市計画のことだけをやってたんじゃ不十分じゃないかと思うようになって学生のうちにいろいろやろうと思って

で、環境と名の付くところに行こうと思って、都市工学で環境衛生工学があると知ったので、それで実は都市工に興味を持った。で、都市工の都市計画コースの先生が駒場に来て授業をする場面があって、それで東京に出て東京の街の成り立ちがこれまで経験してきたことと全然違ってすごく面白いなと思った。

三つ目の原点は田村明の都市ヨコハマをつくるという本だった。都市工の先生の授業もそうだし、田村さんもそうなんだけど、街というのが、横浜はイメージがいいのかなんとかそういうふうになっているのが、実はまちをこうしたいと思う人たちが居て、その人たちの意思によって自然発生的な部分もあるんだけど、人がこうしようと思ったことがまちに反映されているところが面白いなあと考えた。そうするとまちの環境を所与のものとして捉えるのではなくて、自分がそういうところに働きかけることでまちが変わるというのが面白いと思って。それで都市工に行こうと思ったの。ところが、都市工だとあんまり専門的なことは出来なくて、建築の方がちゃんとできると。都市工学科の先生が、有名になりたかったら建築で、金持ちになりたかったら土木で、都市工にいくやつはジェネラリストだみたいなことをいっていて、まわりがみんな建築にいくと言いだしたから、僕は一年目の進振りには建築でしました。そしたら0.1点足りなくて建築に行けなくて、留年したんですね。それは僕にとってすごく良かったことでした。

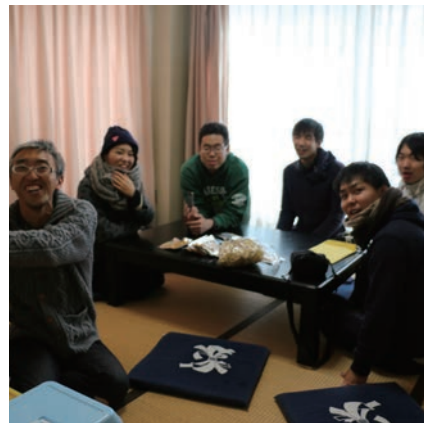
留年して考えたこと

建築か都市工かっていうのは、一年かけて考えようと思ったわけですね。当時

早稲田大学の芸術学校、早稲田大学専門学校で参加のまちづくりと都市デザインを学ぶ社会人向けの講座というのがあったんですよ。それが週に二日、半期ずつあったんですけど、その中心的な先生が卯月盛夫さんと、国吉さん、田村明さん、石山修さん、佐藤滋さん、後藤春彦さんとか、実務の人も柳田石塚建築計画事務所の人たちとか、いろんな人たちがいたわけです。そこに通ったんですよ。それで、そこに行きながら建築か都市工かどっちにいかうか考えつつ、そのときにはじめて参加のまちづくりとか都市デザインにちゃんと触れた。それで僕は都市工に行きました。

もう1つ留年してた時に、僕はもともと活動的な学生ではなくて、サークルと家庭教師ぐらいしかなかったんですけど、留年して暇だったんで、先輩がベンチャー企業を作ろうとしていて立ち上げの手伝いを3年ぐらやってたのかな。それはIT系のシステムを作ったりとかコールセンターに人材派遣をするような事業を始めたので、それにくっついていって、それも一つの転機でした。で、僕は都市計画でこういうことをやりたいといったら、それはだれにとってメリットがあるのかといわれて。その先輩はすごいビジネススペースでものを考える人で、デザインのいいまちとか住民が参加するとかいっても結局みんな経済メリットで動くんだから甘いことじゃなくてビジネスをできるようになったほうがいいみたいなことをいわれました。

僕は都市工学科にいくことにしたんですけど、都市計画のことだけをやってたのでは物足りないとか不十分なんじゃないかと思うようになって、いずれそういう都市計画とかまちづくりとかやりたいんだけど、学生のうちにいろい



▲加工所でつぶもろこしを食べています。

ろやろうと思って、ベンチャー企業とか、ミスコン（平野さんは東大で初めてミスコンを開いた人だそうです）とか、原宿通りで美大生集めて絵描くイベントやったりとか、デビューしたてのラテン系の学園祭ツアーとかテレビ局の仕事とかとにかくイベントをやるっていうことを学生、大学三年生四年生でひたすらそういうことをやっていて、それで院試に落ちたの。

デザ研・大野研で

僕はもともとやっぱり都市工の中では西村先生の都市デザイン研究室のやることに関心が強くて、交通とか国土計画でもないし、そうすると大方研か西村研かってことだったんだけど、あんまり法律よりはソフトっぽいことの方がいいと思って。でも実は卒論はがちがちの都市計画をやっていたんです。さっきいったとおりの岐阜市近郊での農村集落での都市化過程と土地利用の問題に関する研究ということで、なぜ実家回りがあいうふうになったのかということを知りたかった。なので、歴史的な経緯はよくわかって、区画整理の時期とかによって混在とか宅地の大きさとか全然違ってきて、同じロードサイドショップでも、区画整理の時期とか雰囲気全然違って面白かった。

それで（都市工の院試は落ちて）大学院は大野研にも興味があったので大野研に行って。で、大野研に行くと建築と都市計画ってまったく世界と言葉が違うので、すごく面白かった。全然違う価値観で、結構近い領域を扱っているんだけども考えている観点が全然違うということ、大野研に行った中で学びました。学部のころはベンチャーとかイベントとか



やってたんだけど、大学院はいろいろまちに関わることをやろうと思ったので、それで大野研でもドイツ人の留学生が墨田区の向島で博覧会をやって、空地空家で海外からアーティスト呼んできてアートイベントやるっていうのを一緒にやったりとか、研究室だと釜石のことをやっていたので、それをやったり、先生にすすめられて三重県伊勢市のことをやったり大分県佐伯市で医学部に行ってる友達がいる、都市工だけでなく経済とか医学とかいろんな学部の人たちと、みんなでそこのまちのことをやるっていうのを一年半くらいやっていた。鎌倉の風致保存会とかも先生についてやってやったり、一緒にやる人も都市工の研究室、西村研としてやることも大野研としてやることも、全然違う学部の人とやることもあって、とにかくいろいろやろうと。

大学院を卒業、北山創造研究所へ

結果的にはあんまりなにもできなかったところがあって、一年とか二年とかいう時間は結構短い時間だったし、それは僕の力があんまりなくて、僕としては学生のときいろいろプロジェクトやったけ

加工所で生産された石徹白つづもろこし。そのまま食べてもおいしいですが、上の写真のようにご飯に混ぜ込んだりと、様々な食べ方ができます。

どあんまりものにならなかったし、なによりも卒業してそこでびたつと縁が切れてしまうということがすごく自分の限界を感じたところがあったんです。そのときに、北沢先生が修士の修了式の夜の集まりのときに「自分のまちを持て」という話をしていたんですね。じゃあ自分が風の人として頑張るんじゃなくて、土の人としてどっか地域にずっと関わろうと思った。ただそのときやっぱり自分は地方の出身だし、東京のまちづくりはいろんなひとがやると思ったから、どっか地方のまちで、自分が関わってできることをやろうと思った。

いきなりでもそういうところに飛び込んでも。将来都市政策とか都市計画まちづくりに関わるのにどういうふうに仕事をしていくかっていろいろ考えたんだけど結論は出なくて、とりあえず短期間で経験が積めるところに就職しようと思ったのと、あとはやっぱり自分が共感できるところということで北山創造研究所に行きました。

それで最初仕事をしていて、またこの研究所がまったく物事の捉え方が違う。いいなと思ったのは民間の開発なんだけど、それを町のためっていう理念をかかげて開発をすると。亀戸のサンストリー

つづもろこしを使ったご飯と、肉漬など石徹白独自の料理をごちそうになりました。肉漬は白菜と鶏肉とニンニクを漬物にした料理のことで、この集落にしかないとのこと。味噌汁は郡上味噌を使っていて、箸は郡上割り箸。冬が厳しいので保存食が発達していて、皆今でも漬けているそうです。

北沢先生が「自分のまちを持て」という話をしていたんですね。じゃあ自分が風の人として頑張るんじゃなくて、土の人としてどっか地域にずっと関わろうと思った。

トとか普通だったら床をつむんだけど、そうじゃなくて15年間の期間限定で広場を作ってそこをまちのひとたちの居場所にすると。かつそこの広場をお金をかけてやるイベントとただでやるイベントとあって、車の展示会とか若いアーティストとかを年間500くらいあそこでイベントやるんですけども、パフュームとかあそこから巣立っていったの。民間の開発なんだけど町のためとかそういうことをやってたのがすごく面白くて、北山創研に行って北山さんのものの考え方（いまどういう時代にあってそれから五年後十年後どういう時代に向かっているのか考えるとか、それが枠組みを考えるということ）とか、そういう時代の半歩先を考えるだとかいろんな人とのネットワークを作りながら仕事をするとか。やっぱり飲食店とかデザイナーとか経営者の人たちが出入りするところだったので、そういうところからすごく刺激を受けたことがあります。

経営コンサル

ただ、それだけだとあれでちゃんとビジネスっぽいこともしたいなと思ってコン

平野さんのご自宅で、小水力発電や村でこれまで進められてきた地域づくり活動の説明を聞いているところです。平野さんのご自宅は木造の古民家で、心温まるような素敵な家でした。また、今回視察で同席していた和歌山大学の方は農業や環境系の方が多く、平野さんとの議論は勉強になりました。



サルに行ったんですね。経営コンサルは面白かったけど、僕は北山創研で仕事ができない奴で、経営コンサルのときは仕事ができる奴になった。北山創研の方が仕事で難しい。向き不向きもあると思うけど、自分が経営コンサルにとってもむいていると思っていて。2,3ヶ月の短期間のスパンでひたすら一つのテーマについて考えるというのがあったり、複雑に絡み合ってる物事をどういう課題があって物事の整理をして分析をしていくんだけど、それで幅広い解決策の中から最適なものを選択して、そういうことをクライアントに提案していく、クライアントの課題解決に関する仕事をするわけ。よかったのは企業がどういう論理で動いているかっていうのがとてもよくわかったし、サプライチェーンとか物事の流れとかそういうのを捉えるとか、だいたいいつもまったく知らない業界を0から学んでやるので、そういう経験はとても良かったと思う。直接的に役に立って

いるのはファシリテーションとか会議を仕切るのは、いろんな人がいるんな意見がある中で道筋をたてていってそれで毎回会議を重ねながら物事を作り上げていくというのは経営コンサルの経験がとても役に立ったと思いました。他にもどんな仕事でもいろんなこと得られると思うのですが、一つ印象的だったのは三年のうち一年くらい地方の自動車部品の工場の仕事に張り付いていたことがあって。そこは経営者から現場の作業している人までそれぞれの言い分を聞きながら在庫管理とかそういうもののしくみを作るというのがあって、その時に資本主義社会の矛盾を感じて、現場で頑張っている人たちがいて、その人たちの言っていることがすごくまっとうだったりするんだけど、そういうひとたちが工場の意見でばっさり切られたりとか、そういうのを目の当たりにしたことが結構あって、そういうのが社会の矛盾を感じるところでした。

あとはどうでもいい話だけど、経営コンサルは給料も高いし賢い人たちで、MBAでたりした人もいるんだけど、北山創研で見えてきた経営者は圧倒的に面白かったり人間的魅力があったりして。郡上で地に足つけてやってたりとか、石徹白の人と話すときも、頭のいい経営コンサルタントが言うことよりも石徹白のおじいちゃんが言ってることの方がまともでまっとうだったりしたんですね。北山創研の経験も経営コンサルの経験も当然いろいろ役に立っていると思います。

岐阜での活動

でもそうはいっても自分が将来どこのまちにいくかというのが僕の主たる関心としてはあって、たまたま大学院を卒業するときに当時早稲田大学の一年生がいて、ある勉強会で知り合って岐阜で一緒になんかやるうってなったんですね。僕は岐阜にそんな愛着があったわけでは

■石徹白社会科見学の様子

今回のマガジン部・石徹白社会科見学はM2高梨・M1今川・柄澤・中島・森川の5名で行ってきました。

朝5時に東大正門前を車で出発し、お昼頃岐阜県的美濃白鳥駅に到着しました。



豪雪地帯のため、そこで車を置いて、ここからは公共交通に切り替えました。美濃白鳥から石徹白へは1時間ほどで、日曜を除く毎日往復3便ほど運行しています。

1時に石徹白上在所に到着し、平野さんに会いました。

僕はそこで仕事をやめて岐阜に行くって決断ができなかった。自分がやりたいことのはずなのに勇気をもって飛び込めなかった。



▲小水力発電と加工所

ないけど、じゃあ岐阜をやるうってことになった。岐阜大学の学生たちは岐阜のまちってつまんないとか面白くないとかいって、サークルやってバイトやってみたいな大学生活を過ごしていたんだけど、学生のうちにまちに働きかけるといことができるんじゃないかと。それでイベントをやるとかフリーペーパーを作るとか自分が学生の頃にやっていたことをやっていた。そうすると（自分でもいるいるできるんだというふうに）それに影響を受けた人たちとか勘違いした人たちがたくさん出てきて、10年後とかにそういう人たちが新しいことを始めていくと、岐阜ってまちが面白くなるんじゃないかと思いました。で、ひとづくりからまちづくりっていうのを岐阜でやろうと思って、仕事休みのときとか、年始とか長く時間がとれるときには岐阜市に通いました。イベントやるとなるとすごく人が必要だからもっと人をかき集めて、半年で100人くらいスタッフを抱えた

団体を作ってやっていました。それをNPO法人にして、インターンとかをやるNPOに変えることになって。やっぱりイベントやるのって労力かかるから、本当に夏休み1週間とか年末年始とか皆一緒にいてイベント作ってたし、昔からかもしれないけど仲間でなにかを作り上げるのがすごく楽しい。学生のイベントやってたころもそうだし、まちづくりやってたころもNPOやってたときもそうだし、いまもそういうことやってるわけだけど、そこは変わってないと思います。

挫折とそれから

僕は一回そこで挫折をしていて、社会人になって二年目だったんだけど一緒にやってた人が大学を中退して岐阜でNPOをやるといはいじめて。彼は僕より4つ下なんだけど、会社をやめて岐阜で一緒にやろうと、今のタイミング

は岐阜で一緒にできる仲間がいて、目指すところが共有できる人がいて、岐阜でそれなりに注目も集めていて、こんなにいいタイミングはないからぜひ一緒にやろうということをお願いしたわけ。それで岐阜でまちづくりやってる仲間たちも岐阜で一緒にやろうって言うてくれたんだけど、僕はそこで仕事をやめて岐阜に行くって決断ができなかったんです。結構岐阜の子たちが僕の所に泊まりにきて、平野さんが帰るというまで僕は帰らんみたいなのを言われ、僕が仕事から帰るたびにうちに2,3人泊まってるという状態が1週間くらい続いていて、みんな本気で僕を岐阜に帰らせようとしていたわけ。でも僕は北山創研でも仕事ができるほうではなくて、仕事としても不十分だし、経験としても不十分だし、理屈としては岐阜に帰るのがいいと思っても自分の心が動かなかったんです。決断ができなかったんですね。自分がやりたいことのはずなのに勇気をもって飛び込めな



▲インタビューにて

かった。

大いなる挫折をして、一年くらい廃人のような生活をしていました。岐阜のことを2年間くらいやってたんだけど社会人3年目は岐阜のこともやらなくなって、岐阜のなかまたちはNPOを自分たちで作っているんな活動を始めていたわけ。僕としてはせっかく岐阜のことやり始めたし、東京にいてもやれることはあるんじゃないかということで、挫折経験の中で東京にいても岐阜のことをやるっていう支部を作るってことに至って。岐阜でやってた団体はG-netっていうんだけど、G-net東京っていう名前にしました。岐阜のメンバーはフリーペーパー作っていて、水うちわっていう、長良川に浸して仰ぐみたいな岐阜中いるんなところで使われてたものなんだけど、製造されなくなって10年くらいたってたものを復活させようとしたりとか、岐阜のかっこいい中小企業の社長さんたちとか特徴的な事業をやっている会社とか、そ

ういうところの社長さんに東京来てもらって、若い人向けに話をしてもらおうというのをやったり。東京に住んでいる岐阜出身者にUターンの意向のアンケートをG-netの東京支部でやってたり、イベントがあるたびにみんな連れてったりとかいうのをやっていました。

そのうちに、水うちわっていううちわが岐阜でうちわを作っていて、提燈とかも作れるんだけど、紙は上流の美濃で作られて、竹はそこらじゅうで竹があって、うちわって一つのものが基本的には長良川流域でとれるものを原材料にして作っているわけね。そうすると岐阜ってまちで完結してなくて、長良川の上流と下流がつながってひとつの文化圏を作っていたと。僕らの仲間で郡上出身の子がいて、その子の実家の田んぼを手伝いにいったりとか、林業の体験をさせてくれる人がいたりして、東京からツアーを何度かやると、郡上は自然が残ってたり田園風景みたいなんだけど、もともとは農業生産

があっていいとこなのに人が減っているというのを目の当たりにしました。

で、実は林業体験のNPOとか自然体験のNPOとかやってる人たちが長良川河口堰の反対運動をしている人たちだったの。その人たちがすごくかっこよくて、山の話をするとか自然体験とか愛知県からいっぱい子供連れて行ってするんだけど、ただ遊ぶだけでなくて農作業とか手伝ってもらったり、郡上の元の風景を体験してほしいと思ってるわけ。ところが耕作放棄地が増えてくると人が手入れして管理してきた田んぼとか荒れて行ってもともとあった風景がなくなっていくから、そうすると子供の自然体験だけでなくて、農地を復興するみたいなのを都会の人が関わりながらやるっていうのをやっていました。すごく地に足をつけていて、でも問題意識はすごくまっとうなものをもって実践をしている人たちが郡上にたくさんいるということを郡上に通いながら知って、すげえかっこいい

まずは白山中居神社に行きます。雪かきをして人一人通れるほどの小道が作られ、なんとか神社にたどりつきました。



同時に視察に訪れていた新聞記者の方と、和歌山大学の方々と合流し、小水力発電装置の見学に行きました。



夕方から平野さんのご自宅で、小水力発電や地域づくりの取組に関する説明をお聞きしました。

活発な議論が交わされた後、旅館に移動して晩御飯となりました。和歌山大学の貸し切りバスを運転されていたドライバーの方と仲良くなりつつ、美味しいご飯を食べました。平野さんが東大で初めてミスコンを開いた方だということを聞いて少し衝撃を受けました。

夜は柳田國男や宮本常一も泊まったことのあるという歴史ある藤屋旅館で飲み会。平野さんや記者の方、和歌山大学の方と、深夜まで都市について議論していました。



次の日は朝加工所で石徹白つぶもちを食わせていただいた後、平野さんにインタビューしました。また、平野さんの奥さんにはとても美味しい石徹白独自のご飯をいただきました。ご馳走様でした。

皆さんで写真を撮らせていただいた後、お昼頃再びバスに揺られて郡上白鳥駅に向かいます。駐車していた車は完全に雪に埋もれていました。

帰りは重伝建である郡上八幡に少しだけ寄ることができました。また、駅舎が温泉施設になっているという、みなみ子宝温泉で温泉に浸かり、今回のインタビューや見学したことを振り返りました。その後は車で高速を走り、真夜中過ぎてようやく大学に着き、この社会科見学は無事終了となりました。

と思いました。まちにいてそういうのが課題だっていってるのと違って現場でそういうことを実践していくのがすごいと思ったわけね。

それで岐阜のメンバーで長良川流域持続可能研究会っていう勉強会を始めたんだけど、長良川流域で持続可能社会を作るにはどうすればいいか、将来的には天然のあゆが戻ってくるようになるにはどうしたらいいかっていうのを始めました。それで岐阜 NPO センターの理事長や地域再生機構の理事長をやってる人がきて、いろいろ教えてくれて、もともと農山村は食とか農山村が自給できた。高度成長期以降は外からものを買うようになったので、トラクターが入ってきたりとか手植えが田植え機に代わったりとか、それでエネルギーが必要になって、機械も車も電気も外から買うし、そうすると燃料代とかエネルギーだけですごい支出になると。外からものを買わないといけない社会体系になって、地域が衰退してきたという側面があって、エネ

ギーとか食べ物を賄える分は地域で賄って地域からお金が流れ出ていくことを止めるっていうこと。グローバルで持続可能社会を実現していくことは難しくて、それもやらなくてはいけないけど、地域地域でそういう持続可能な社会を作ることがトータルでグローバルな意味での持続可能な社会を作ることにつながるんじゃないかと考えました。郡上だったら水力発電をやるうということになって、いろんな地域に持ちかけてった中で 2007 年夏に石徹白にきました。

石徹白へ

それで 2007 年に石徹白に来て、手前まで来たことあったけど奥があるとは知らなくて、すごいとこだなと思って。水力発電設置するっていうのをうちの嫁さんが中心になってやっててそれについてきて週末ここに通ってたわけよ。そしてここがすごく面白い地域だということがわかってきて、それは歴史が深いとい

うのもそうだし、人口が 1/4 に減ったということもそうだし、なんか面白かったのは自分の親世代の人たちがおじいちゃんくらいの感覚があるというのが一番面白いところで、昭和 40 年代まで冬外に出れないみたいな地域だから、感覚が全然違くて。自分でなんでもやるというか、ちょっとした大工仕事を自分たちでやるとか除雪とかもそうだし、木を切るとかもそうだし、なんか手を使ってなにかを作る感覚だったり歴史とか文化とか信仰に対する感覚とかももとはどこにでもあったけど失われつつある暮らしの知恵とか価値観をこの人たちはまだ持っているというのがあって、そういう人たちといろいろなことをやっていきたいなと思いました。

そういうことがあって、それでここに住もうとなったんです。エネルギーの問題は今後必ず問題がでてくると思っていたので、エネルギーを一つ仕事にしよう。自然エネルギーを仕事にするということと、この集落を再生をするというこ

自分が自分のまちを持てと いうことで探していた場所 はここだったんだと思った。

との二つをやっていこうと思い立って、自分が自分のまちを持てということで探していた場所はここだったんだと思った。それで 2007 年夏に来たんだけどその半年後には会社を辞めていて、それで岐阜に戻ってくることにしました。本当はもう少し長いこと会社勤めするつもりで、35 から 40 くらいに会社辞めて独立しようと思ったんだけど思ったより早くその時が来て、僕はかつて挫折をしてたけど、20 代のころは悩ましい 20 代を過ごしていて、将来どういうことをやろうかずっと考えていてなかなか結論が出なかったところがあった。やっぱり会社を辞めて事業を起こすとか田舎に飛び込むというのはすごい特殊な人が出来ることで勇気のいることだと思っていたわけで、そういうのは自分にはなかなか

できないと思ってたの。で、ある時挫折をしたという話をベンチャー経営者の集まりでリクルート出身の人に聞いたら起業は気負ってやるものではなくてやるときが来たら腑に落ちたってときに絶対あるんだって言われました。だから無理やり決断をするようだと本物ではなくて自分がなにかやろうと思うときは腹に落ちたときにそういう行動が起こせるんだということを言われていて。石徹白に来て仕事辞めるときは本当にそんな感じで、新しいこと始める気持ちがいまでは 10% くらいだったんだけど、いきなり 200% になったみたい。だんだん上がってくるのかと思ったら、迷う余地が全然なくてここに来るんだと思って仕事やめてここにきたと、そういう感じです。ここに来てからは個人事業として経営

コンサルをやっていこうと思っていたんだけど、仕事やるうえでは法人格があった方が仕事しやすいということがあって、地域再生機構という休眠していた NPO があって、その NPO を引き受けて、自然エネルギーの導入や調査の仕事を始めて、それで小規模な水力発電や木質バイオマス導入の仕事を始めた。そういう仕事をやりながら石徹白に通って水力発電を導入しながら地域づくりをするっていうのを始めて。なかなか家が見つからなかったのでもずっと通ってたんだけど、2010 年の冬にこの家を手に入れて改装して 2011 年 9 月に入りました。



帰る直前に、平野さんのご自宅前で集合写真

■平野さんからのメッセージ

最後に、平野さんから都市工学科と専門性・進路に関して以下のようなメッセージを頂きました。

＊
都市工学科特有の「専門性」や「思考パターン」というのがある。それは、昔も今も、変わっていないような気がする。専門性にとらわれることは、創造性に欠けることだと僕は思っている。専門性にとらわれることによって、発想の自由度が狭くなってしまう場合がある。都市工学科の持つ「専門性」は、ある場面においては、とても力を発揮する。（まちが持っている課題を解決する上で、都市工学科の持つツールが、パチッとまる場合がある）しかしながら、まちの課題というのはもっと多様だし、課題解決の手段というのは無限にありうるわけで、専門性や手法論にとらわれることによって、課題の本質を見失ったり、まちの人たちの心に寄り添うことのできなかったり、本当の課題解決につながらなかったりする場合がある。

僕自身は学生の頃から、都市工学科とは違うコミュニティを持つようにしてい

た。（ベンチャー起業家仲間や、イベント仲間や、他大・他学部・他学科の友人や、美大生・アーティスト・留学生など）そこからまちづくりのことを考えると、思いもつかないような視点や発想が出てくる。すると、自分が、ある種の固定概念にとらわれていて、自由な発想ができていなかったと気づく。北山創研、経営コンサル、岐阜での NPO 法人立ち上げ、その東京支部の立ち上げ、そして、岐阜に戻ってきてからの活動（石徹白での活動、自然エネルギーの活動）の中で、多種多様な人たちと、まちづくりに関するプロジェクトをやってきた。立場や経験によって、着眼点も発想も手法も、まったく異なっていた。そのときどきの状況の中で、課題とメンバーの中から最適な手法を選択するということをやってきた。これらの経験の中で、新たな発想や、新たな仕組みづくりをしてきたと思う。

人は誰しも、その所属している組織やコミュニティの発想や手法にとらわれがちである。そのようにならないように、下記のようなことを心がけている。「まちの課題や構造を、よく観察して、よく

考えること」「関係する人の声に耳を傾け、その人のやりたいこと・得意分野・心の底にあることを理解すること」「自由に柔軟な発想を持続続けられるように心がけること」「多種多様なバックグラウンドを持った人たちとつながり、ともに取り組むこと」「固定的な手法論や、所属する組織の立場・発想にとらわれすぎないこと」

手法論や事例を学ぶことも大切であるが、手法や事例が生まれてきた背後にある「哲学」「姿勢」「行動原理」「メカニズム」がとても大切であると思う。たとえば、僕の小水力発電導入を軸とした地域づくり活動については、その表面的な手法を真似することはあまり意味がないと思っている。軸となる専門性を持つことはとても大切であるが、その専門性を持ちつつも、自由に柔軟な発想を持ち、課題の本質を見極め、多様な人材を集めて、人々の心を束ねてプロジェクトを推進していくことのできる、「まちの課題解決ができるプロデューサー的人材」が、都市工学科からたくさん巣立ってほしいと思っている。



当日は B2 から M2 までの多くの学生で大盛り上がりでした



設計事務所の仕事とは 10/24 としと一く報告

What is the work of a Design Firm?

A Report on Toshi-Talk, October 24th

去る 10/24 (金) に初の試みとなるとしと一くが開催されました。「としと一く」は都市にまつわる様々な仕事に携わる方々をお呼びして、都市の仕事を知ることが目的としています。都市にまつわる仕事には、その対象から関わり方に至るまで様々なものがありますが、就職活動の時期を除くと、われわれ学生がその実務について知る機会は限られているのが現状ではないでしょうか。

その第一回として設計事務所に勤務されている都市デザイン研究室 OB/OG の伊藤雅人さん (H20 修了・日建設計)、鎌形敬人さん (H21 修了・三菱地所設計)、永野真義さん (H23 修了・日本設計)、前川綾音さん (H24 修了・日本設計)、矢吹剣一さん (H24 修了・久米設計) の 5 氏をお呼びして、様々なお話をお聞きました。ここでは、会の一部をご紹介します。

*

一まずは自己紹介をかねて、最近やっていることについて教えてください。

矢吹：久米設計の矢吹です。都市デザイン研究室を修了して 3 年目になります。入社 2 年目には、オリンピックの施設の

基本設計をずっとやってきました。今の都市計画だと臨海部のオリンピック施設は建てられないので、どのように都市計画を変更したら建てられるか、という検討をしていました。

伊藤：日建設計の伊藤です。私は黒瀬先生の 2 つ下で、都市デザイン研究室を 08 年に修了しました。今 7 年目です。上海で歴史的な建造物を残しながら都市開発をするコンペがあり、日建設計が 2013 年に参加して 1 位をとり、今はそのつながりでまちづくりに向けて動き出しています。

鎌形：三菱地所設計の鎌形です。今 6 年目です。5 年目までは地所設計の都市開発マネジメント部にいたのですが、今年から親会社の三菱地所に出向しています。大手町の連鎖型再開発や四川省での国際コンペ、横浜駅周辺の行政マスタープラン作成などに関わってきました。

前川：日本設計の前川です。矢吹君と同期で、都市計画群というところで働いて今年で 3 年目になります。広島の人口 4 万人の都市・府中市で、道の駅によるまちを活性化の仕事をやっている、それに併せてマスタープランを作成したことが印象に残っています。

永野：日本設計の永野です。僕は今、都市計画ではなくて建築設計の仕事をしています。入社してから、藤沢のスマートタウンの配置計画や刑務所の詳細設計、東京日本橋の再開発事業などに関わってきました。刑務所の設計はおもしろかったですね。

一今の設計事務所に入社を決めた理由は何かですか？

矢吹：久米設計は人数がそこまで多くなく、いろいろな分野を横断的にやらなくてはいけないところがあります。そこに魅力を感じて決めました。

鎌形：正直なところは、同期のつてでたまま OB 訪問ができて、気づいたら入っていたみたいなどころがあるんですが、よくよく考えてみると、エリアのまちづくりと単体のプロジェクトをちゃんとつないでいく、みたいなことがやりたかったのだと思います。三菱地所設計は大丸有や MM21 をやっていて、ここならエリアのことを考えてそれを建物に落とししていくことができるのではないかと思います。

永野：設計と開発でどっちをやろうか迷っていたんですけど、就活をやっているうちに設計のほうがいいのかと思

い始めました。で、設計が一番楽しそうなのが日本設計かなと思ったんですね。日本設計にはチーフアーキテクトでチームをつくって、チーム単位で設計しますよということだったんです。5~6 年でチームを移っていくのですが、いろいろな人の設計を吸収できるのかなと思決めました。

一どのようなひとが向いていますか？

伊藤：日建設計というのは、日本の組織設計事務所の中で一番規模がでかいんですよ。規模がでかいてことは仕事量が単純に多い。仕事も多様で、自分が成長できるチャンスがたくさんあるんじゃないかと思ってました。人数も多いので多様な人が働いています。都市計画の人をとっても、今 150 人くらいいるのかな。なので、こういう人が日建に向いているというのは特には無いと思うんですが、特徴的なのはエネルギーな人が多いですね。仕事でも仕事以外でも、100%楽しんでやるというか。チャンスは色々なところに広がっているんで、これもやりたいしあれもやりたいという人には良いと思いますね。

永野：確かにそう思います。僕も OB 訪問して、黒瀬さんだったんですけど、これは暑苦しいなと (笑)

一女性の職場環境はどうか？

前川：定時に終わって帰るというスタイルの仕事ではないですね。お客さんを相手にしているので、夜電話がかかっ

くることもありますし。たとえば、お迎えに行かなきゃいけないような状況になったら、何時に行くだろうと思うことはありますね。

永野：産休・育休はしっかりしているよね。それ以外は女性はしんどいかもしれないよね。

伊藤：最近そのことについてよく考えるんですけど、設計事務所だから 10 時 11 時までやって当たり前という風潮がある以上は、本当に男女平等に機会が与えられているとは言えないですね。海外とかの事務所を見ていると、女性がトップみたいなのが結構あるんです。でも、日本ではあんまり無いんですね。制度はしっかりしてきてるんですけど、本質はそういうことじゃないと思います。

一都市計画系で何人くらいいますか？

鎌形：うちの都市計画部門は 14~15 人で、あんまり人が多くなくて、都市全体を描くような Urban Planning からビル単体の Project Consulting みたいなどころまで、一つの部署がすべてやっているところに特徴がありますね。

伊藤：それ結構すごいことですよ。日建は 150 人くらいいて、人によっては入社してからずっと同じようなことをやっている。人数が多いのも善し悪しかと。

矢吹：久米設計の都市計画は 30 人くらいです。地所設計と同じように少数で色々やっています。

前川：うちは都市計画群という単位では 70 人くらいだと思います。そのうち

半分が再開発をやっている人で、残りの 30 人でその他の仕事をやっているという感じです。ちなみに、女性は 1 割もいないくらいです。

一「ここだけは変えたい！」という都市空間ってありますか？

鎌形：ハードの話では全くないのですが、会社に入ろうとしたときから、容積率の次のインセンティブを考えたいと思っています。大都市ってどんどん超高層が建ってるじゃないですか。あれって超高層にしたいってしているのではありません。相当多い気がしているんですね。「超高層のまちにしたいんです」、「こんな素敵なまちになるんです」っていうことであれば良いことなんですけど、「たまたま容積もらっちゃったから高くなります」ってのはおかしいんじゃないかって。

伊藤：いまビルを建て替えるときに、たとえば容積率 600% を 1000% にしないとお金が回らないってのが現状なわけですけど、30 年、40 年、50 年経って、1000% にしたビルをまた立て替えたいってなったときに、1400% にするのかって話なんですよ。それで人が入るのかって。日本全体でシュリンクしていくわけだから、本当に容積率でない何かが必要ですね。

*

今回のとしと一くは 4 月の開催を予定しております。奮ってご参加ください。

(編集・M1 中島)



▲各々の修士論文・修士設計とともに (左から矢吹さん、大熊さん (懇親会より参加!))、前川さん、鎌形さん、伊藤さん、永野さん)

Information

12 月のウェブ記事

第 2 回 20 世紀都市遺産セミナー開催！
第二回、第三回神田勉強会「住」と「衣」
A workshop and two seminars with the title 'Vital Urban Spaces' in Santiago de Chile
ICCL - International Competition for Cultural Landscape by Division for Conservation of Heritage Sites (DCHS), Bhutan
オランダ便り 2
中間発表会に向けて
new member introduction: João Silva Leite
是非ご覧下さい: <http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>

1 月の予定

1 月 9 日	研究室会議
1 月 25-26 日	大槌訪問

編集後記

今川 高嶺

平野さん、この度は本当にありがとうございました。石徹白社会科見学・平野さんインタビューの中で、風の人か土の人か、専門性とは等、多くのことを改めて考えさせられました。



URBANDESIGN
LABORATORY